

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 210GH204

第 号

氏 名 任 明 嬌

人文社会科学 専攻 (コース: 現代共生)

論文題目

明代中国における永楽政権以降の朝廷政治についての研究

——特に権力構造における官僚の役割を中心とした検討

中国の長い歴史の中でも、明代は現在とのかかわりで大変重視されている。朱元璋という人物が作った国だが、第三代の皇帝である永楽帝は叛乱を起こして皇帝になった人物である。そういう意味で、永楽帝は明朝という国家を造り直した。従って、明朝という国家を理解するためには、永楽帝がどのような国を造り、それがその後、どのように変化して、定着していったのかを知らなければならない。

永楽帝が崩御した後、彼の息子の朱高熾、孫の朱瞻基は前後して即位した。これが明の仁宗、明の宣宗であり、研究者の中にはこの時期は明朝政治史の中では清明で、国力は隆盛で、人民の生活は安定していて、経済は急速に発展したので、仁宣致治と呼び、永楽盛世と宣徳時の太平を合わせて「永宣盛世」と呼ぶ人もいる。この時期の政治についての研究は、中国や日本において高い関心が払われ、すでに多くの言及がある。しかし、これらの論述は個人を分析するか、三楊と内閣の関係を大まかに分析するかであり、この時代の重要な権臣をトータルとして分析して比較した論文はない。本論文はこの点に着目し、先人の研究成果を参考にした上で、史料を分析して、これまでの論証を比較し、まとめて新たな視点を打ち出そうとするものである。本稿は、三楊内閣の三楊と四朝老臣の蹇夏についての研究、及び彼らの朝廷に対する役割を研究することによって、永楽以降の朝廷政治権力構造及びその変化をより深く研究したいと考えている。

明初の政治は、洪武、永楽から洪熙、宣徳まで、洪武帝が宰相を廃止した。中央集権の確立から、内閣の輔政へ、厳猛治世から寛疎治世などへの一連の重大な政策変化と調整を経験した。政治情勢の変化は人材需要の変化を招き、永楽以降の政権中枢には、洪武朝から高位に立っている蹇義、夏原吉などの人物と、永楽政権の成立により徐々に昇進してきた三楊内閣の楊士奇、楊榮、楊溥のような人物がいた。それでは、洪武年間から長期間高位に居た旧臣と永楽政権ができてから昇進した官僚との格差があるのだろうか。最新の永楽政権研究に基づくと、永楽政権以降は、永楽時代の政策の立案と実施が切り離された状態から、立案と実施が一つの官僚組織でまわりはじめていたと考えられる。永楽政権以降は、永楽時代の政策の立案と実施が切り離された状態から、立案と実施が一つの官僚組織でまわりはじめていたと考えられる。これから内閣制度が実質的に成立したのである。それでは、永楽帝崩御後、官界の中枢に身を置いていた閣臣たちの地位にどのような変化があったのだろうか。永楽政権以降の朝廷政治の中心にいった内閣の三楊・老臣蹇夏たちは、どのような役割を果たしたのだろうか、そして永楽後閣権と部権の比較によって、朝廷政権構造の変化を分析した。本論文の成果が中国歴史認識の一助となり、視野や構想を広げるようなものになることを目指したい。